

狂戦士は夜を駆ける

炸裂プリン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

? Bloodborne にガッツ叩き込んでヤーナムの住人を蹂躪しただけの話。

目次

狂戦士は夜を駆ける

1

狂戦士は夜を駆ける

? 白々しくも地表を照らし、日々の安寧を嘯く月光の下で、鈍色の鉄塊が風を食み、闇を喰らい、肉を裂き、骨を破り、血を啜った。

「チツ!? どうなつてやがるんだ、この街はよォ!」

? 黒曜の甲冑と同色の夜を孕む外套を血に濡らしながら、長身の巨軀——ガッツが叫んだ。

? 今まさに斬り払ったヒトガタの怪物は、異様に発達し獣が如く剛毛を携えた腕に鋏や鋤、手斧等の農具を武器として襲いかかつてきた。薄暗く仄暗い霧に隠されたこの街の住人である。

? 旅を続けるさなか、夜も更けた折に訪れた人の消えた小さな協会の跡地にて、神を呪いながら眠りについたガッツが目を覚ましたのは、人とも獣とも区別が付かぬ遠吠えと悪臭が支配する、しかし不自然なまでに静かな場所。

? 意識が浮上した時は何の冗談かと瞑目したが、その隙を突いて解読不能の雄叫びと共に襲いかかる人影を斬り捨てたガッツはこの街そのものに投げ掛けるように呟く。

「薄気味わりい街だが、住んでる奴らも街に似るのかよ」

？ 斬撃を放てる鉄の塊、即ちドラゴン殺しにこびり付く血糊をひと薙ぎで振り払うと、ガッツは路地裏から倒壊しかけた家屋からその屋根から街路樹の影から次々と幽鬼の様に現れる人影——否、人を模した獣たちを鋭く見据える。

「——ッ!!」

？ 問いかけにはしかし、言の葉を忘却し、己が胸中で悍おぞましくも吠えたてる獸性に屈服した人々は、垂れ流す汚らしい薄黄色の唾液と溢れ出す唸り声でしか応じる術を持たず。しかし、その暗く濁り落ち窪んだ灰色の瞳こそが雄弁に語ってみせた。
？ 狩つてくれ。と。

「………そうかい」

？ その意を汲んだのか、それとも唸り声を開戦の笛の音と受け取ったのか、ガッツは巨剣を構え、嘗ては人であった獣の群れへと疾走する。

？ それに応えるように、或いは死へと飛び込むように、それとも灯りへ誘われる虫のようにフラフラと駆け寄るは獣の人影。

「しっ——」

？ 先駆けにと放たれた投げナイフは、先頭を走る手斧の獣、その心臓を確かに穿つともその歩を僅かに遅らせる事しかままならず、しかしその播らぎこそが獣の死出を誘いそなう舞踏

となる。

「まず、一つ!!」

? 一閃。

? 最小限の動きにて大上段から放たれた剛の一撃は、獣の身体を文字通り両断してもまだ止まることなく突き進み、石畳を粉砕して漸くその進撃を止めるに至った。

? 破碎された石畳の破片が、巨剣を振るい足を止めるガッツを囲もうと急ぐ獣たちへと飛来。石礫の弾丸となつてその身を強かに打ち据え、またある者は蕩けきつた眼窠を食い破やれ脳を潰し、またある者は頭骨を粉碎し、首の骨を砕かれ、胸骨と肋骨と内蔵をぐちやぐちやに掻き混ぜながら絶命した。

? 辛くも生き残つた者達は、しかし既に攻め入る氣勢を失い土煙の中でゴボゴボと唸るばかり。

? そして、その様な隙を見逃すガッツではない。

「らあああ!」

? 石畳に深く食い込むドラゴン殺しを鋭く抜き放ち、淀んだ空気ごと薙ぎ払う横一線の斬撃を繰り出す。

? 放たれた斬撃は、土煙を一息で吹き飛ばし、もはや危機管理能力すら獣性の忘我へと押しやった獣たちを容易く捉え、群れるその胴の悉くを喰らい尽くし、振り抜いた先に

寂しく佇む街灯をも両断せしめた。

? ガチン、と一瞬の火花と共に束の間の静寂を得るこの場所は、古都ヤーナム。

? 獣狩りの夜が延々と繰り返される悪夢の街。

? 狩人が夜を駆け、肉を裂き、骨を断ち、意志を砕き、血を焼き尽くす終わらぬ月光の従僕。

? 今宵、降り立った黒衣の剣士は、果たしてこの久遠の悪夢を抜け出せるのか。

? 異邦人が獣狩りの掟に沈むのが先か、天中より見下ろす上位者を超越し、醜悪なる月を打ち砕き現し世へと帰還を果たすのか——月光花に溺れる老人は妖しく嗤いながら、その果てを楽しげに夢想した。